

# トマス・アキナスにおける御言とアイデア

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡崎, 文明, Okazaki, Fumiaki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00000182">https://doi.org/10.24517/00000182</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# トマス・アクィナスにおける御言とイデア

岡崎 文 明

## I 序

〔1〕トマスにおいて、神の認識は三位一体論と創造論の根本をなすといわれる。<sup>(1)</sup>そして三位一体論は御言 (Verbum) を、創造論はイデア (ideae) を基礎にする。拙論の目的は神の認識において御言とイデアがいかなる位置を占めるかを見るにある。便宜上拙論では res に対する ratio を「観念」と、conceptus と conceptio を共に「概念」と訳すことにする。<sup>(2)</sup>

## II 神の知性認識

〔2〕神は存在の純粹現実態である。それは神があらゆる意味で完全であることを意味する。したがって神は単に「存在する」(esse) ばかりではなくて「生き」(vivere) かつ「知性認識する」(intelligere) ことをも含んでいなければならない。<sup>(3)</sup>しかも純粹現実態であるからいかなる可能態も含まない。したがって神は最高度に非質料的であり、それ故最高度の認識の働きにおいて在る。<sup>(4)</sup>即ち神は知性認識の働きにおいても純粹現実態である。かかる知性は、我々の知性の如く最初に可能態にあり後に現実態にある<sup>(5)</sup>という在り方をせず、常に現実態にある故、(1)知性 (intellectus)、(2)知性認識されるもの (intellectum) 即ち認識対象、(3)可知的形象 (species intelligibilis) 即ち「それによって知性が対象を認識するところの形相」(forma qua intellectus rem intelligit)、<sup>(6)</sup>(4)知性認識の働き (intelligere) の四つはすべて同一で、神の本姓となる。そしてそれは神の本質 (essentia divina) に外ならない。<sup>(7)</sup>それ故神の知性は自分自身 (知性認識されるもの) を自分自身 (可知的形象) によって知性認識するといわれる。<sup>(8)</sup>したがって神はまず自己を認識する。かかる

自己認識は思弁的である。それは神は自己を制作しないからである。<sup>(9)</sup>

〔3〕しかし神は単に自己を認識するばかりではない。また神以外の一切のものをも認識する——ここで言う「神以外の一切のもの」とは過去、現在、未来に亘って永劫にこの世界に出現することのない所謂「非有」(non entia) も含んだ全被造物を指す<sup>(10)</sup>。神が全被造物を認識する根拠も同様に神が純粹現実態であることに存する。神は純粹現実態であるからその認識は完全である。それ故神は完全に自分自身を認識する。完全に自己を認識する者はその能力をも又完全に認識する。その能力が完全に認識されるためにはその及ぶ一切のものが認識されなければならない<sup>(11)</sup>。神は万物を造り万物に及ぶゆえ、全被造物をも認識しなければならない。

ところで被造物はすべて、その類似(similitudo)として、神の本質に包含されている。神が被造物を認識することはかかる類似を見ることに外ならない。したがってかかる類似は神の知性認識の対象即ち「知性認識されるもの」の位置にある。よって神は自己の本質において全被造物を見る。<sup>(12)</sup>

神は被造物の或るものを創造する。したがって神はそのものを単に思弁的に認識するだけではなくて、実践的にも認識する<sup>(13)</sup>。かかる被造物の認識は高次の神の思弁的な自己認識の内に包含される<sup>(14)</sup>。したがって神は一つの知性認識によって自己と全被造物を認識する。

〔4〕次に知性認識における「可知的形象」と「知性認識されるもの」(認識対象)を見よう。

凡そ働き(actio)には二種類が見られる。一つは働きが働く者(agens)から外へ移ってゆくものであり、いま一つは働きが、働く者自身の内にとどまるものである。知性認識の働き(intelligere)は後者に属する。<sup>(15)</sup>

また凡そ働きは形相に従って(secundum formam)行なわれる。かかる形相は働きの対象の類似(similitudo obiecti actionis)である。

知性認識の働きにおいては、かかる形相は「それによって知性認識するところの可知的形象」(species intelligibilis qua intellectus intelligit)<sup>(16)</sup>に外ならない。それ故可知的形象は「知性認識されるもの」の類似<sup>(17)</sup>であって、「知性認識されるもの」ではあり得ず、「知性認識されるもの」と明確に区別される。

トマスは、神の知性認識において両者のかかる区別を明確にこう述べている。

「造られたもののイデアはそれを造るものの精神のうちに『知性認識されるもの』として在るのであって、そのものがそれによって知性認識される『形象』として在るのではない。この形象は知性を現実態たらしめる形相である。」<sup>(18)</sup>

それ故神の知性認識における「知性認識されるもの」はイデアである。それでは、これに対して「可知的形象」は一体何であろうか。

### III 御言 (Verbum)

〔5〕次に我々は可知的形象について考察することにしよう。凡そ働きが、-「それに従って行なわれる形相」(forma secundum quam provenit actio)は働く者から発出する。知性認識という働きにおけるかかる形相(i. e. 可知的形象)は知性の内に発出する。発出した形相は「知性認識された事物の概念」(conceptio rei intellectae), 「精神の内的な概念」(interior mentis conceptus), 「心の概念」(conceptus cordis),<sup>(19)</sup> 或いは「知性の概念」(conceptus intellectus)<sup>(20)</sup>と<sup>(21)</sup>言われる。更にこれを「心の言」(verbum cordis)<sup>(22)</sup>と言われる。

神の知性におけるかかる「概念」乃至「言」(以後心の言を単に言と表記する)を「神の言」(verbum divinum)<sup>(23)</sup>という。それ故神の知性認識における「可知的形象」は「神の言」乃至「神の知性の有する概念」に外ならない。

次にかかる「神の言」の性格を見なければならぬ。人間知性の内に発出する言乃至概念は「形成されたもの」(formatum)<sup>(24)</sup>である。神の知性の内に発出する言は「生まれたもの」(genitum)<sup>(25)</sup>といわれる。

一般に「生まれたもの」は次の四つの性格を有する。<sup>(26)</sup>

- (1) 生命あるもの (viventia) において発出する。
- (2) 自己と結合した生ける根原 (principium vivens coniunctum) から発出する。
- (3) 類似という規定 (ratio similitudinis) の下に発出する。
- (4) 根原と同じ種の本性 (natura eiusdem speciei) にとどまる。

神の言は以上の四つを満たす。なぜならそれは<sup>(26)</sup>

- (1) 知的活動 (actio intelligibilis) という仕方の生命の働きによって知性の内に発出する。それは「知性の概念」だからである。
- (2) 自己と結合した根原より発出する。したがって神の言は起源の関係 (relatio

originis) を含意し、ペルソナを意味する。それ故それは「御言」(Verbum) と呼ばれる。他方、根原は「御父」(Pater) と呼ばれる<sup>(27)</sup>。

- (3) 類似という規定を有する。神の言は御父の類似であるからである。それ故それは御父の「似像」(Imago) といわれる<sup>(28)</sup>。
- (4) 根原と同一の本性にとどまる。即ち神の言は神の本性を有する者として発出する。それ故それは「御子」(Filius) といわれる<sup>(29)</sup>。

以上から神の言はペルソナとしての御言を意味する。それ故神の知性認識における可知的形象は、ペルソナとして表示すれば、「御言」となる<sup>(30)</sup>。

〔6〕御言は御父から出生 (generatio) という仕方では発出する。かかる発出は実在的 (secundum rem) といわれる。したがって御言も御父も各々もの (res) として区別される。しかるに他方では神の言はその発出源 (御父) と完全に一であり、どんな差異も無いといわれている。御言も御父も神の知性即ち神の本質であるからである。それでは両者はいかなる意味で区別されるのであろうか。

神は最高度に一であり単純である。したがってかかる神において複数のもの (res) として存在するのは、善性とか智慧等の「絶対的な固有性」(proprietas absolutae) ではない。これらは神において実在的に区別され、相互に対立するものではないからである。神において複数のものとして存在するのは「関係」(relationes) である。御父は出生の「根原」(principium) という関係 (これを父性 paternitas と呼ぶ) を表わし、御言、御子は「根原からの発出者」(procedens a principio) という関係 (これを子性 filiatio と呼ぶ) を表わす。そしてこれらの関係は実在的であるといわれる<sup>(32)</sup>。

御言と御父が区別されるのはかかる関係によってである。それでは実在的關係とは何を意味するのであろうか。

〔7〕実在的關係 (relatio realis vel secundum rem) を見る前に観念的關係 (relatio secundum rationem) を見ておこう。

関係には二項がある。「観念的關係」乃至「観念の關係」(relatio rationis) とはその項が「観念に属するもの」(res rationis) である関係をいう。例えば理性が、一つのものを二度に亘って捉え、かつ一方の他方に対する一種の関係を捉えるところに成立する。有に対する非有や類に対する種の関係がそれである。したがっ

てかかる関係は理性の把捉 (apprehensio) の内<sup>(34)</sup>にのみ存在する。

「観念の発出」(processus rationis) とは発出源と発出者がかかる関係である場合<sup>(35)</sup>をいう。「観念的区別」(distinctio secundum rationem) も、区別されたものがかかる関係であることを意味する。イデアは後に見る如く〔12〕神の本質の観念的区別によって生じるといえよう。

これに対して「実在的關係」とはその項が「本性に属するもの」(res naturae) である関係をいう。これは両項が同一の秩序に属し、本性上相互に秩序づけられており、相互に対する傾向を有する関係である。2倍と半分、父と子等の関係がそれ<sup>(34)</sup>である。

「実在的発出」とは発出源と発出者が実在的關係である場合をいい、「実在的区別」も区別されたものが実在的關係であることを意味する。

御言と御父は共に同一の本性を有し、御言は御父から出生するという秩序を有する。それ故両者は実在的な関係といわねばなら<sup>(36)</sup>ない。それ故御言は御父から実在的に発出し、実在的に区別される。

御言も御父も<sup>・</sup>自存する<sup>・</sup>関係 (relationes subsistentes) である。かかる関係を「神の本性において自存するもの」(res subsistens in natura divina) ——この意味で御言も御父も<sup>・</sup>ものといわれる——という。そしてこれはペルソナに外なら<sup>(37)</sup>ない。

〔8〕一般に言は次の特質 (ratio) を有する。(i) 何かを明示する (manifestare)  
(ii) 実在的に発出する (processus realis)<sup>(38)</sup>。ところで御言も言である限りこの特質を有する。既に見たところから (ii) を満たすことが判る。それでは御言は (i) の特質である明示者として一体何を明示するのであろうか。

神は根原的に (principaliter) 自分自身を知性認識する。そして御言が発出する。したがって御言は御父の概念として御父を明示する。更に御子、聖霊も明示する。つづいて (consequenter) 御父は自分自身を認識することによって、全被造物を認識する。したがって御言は全被造物をも明示する。それ故御言は三位一体すべてと全被造物を明示する。更に御言は被造物を表現するばかりではなくて造り<sup>(39)</sup>もする。

トマスは御言の特質を簡潔にこう述べている。「御父は自己と御子と聖霊と、そして凡そ自己の知のうちに含まれる他のすべてのものを知性認識することによって御言を懐抱する。(これは御言の実在的発出を意味する〔筆者註〕。) だからこの意

味では、全三位一体が、そしてまたすべての被造物が、御言によって語られる<sup>(40)</sup>」

#### IV イデア (ideae)

〔9〕イデアは既述の如く〔4〕、神によって「知性認識されたもの」の位置にある。即ちそれは神の知性認識の対象である。イデアは神の本質における被造物の類似 (similitudo) として存在する〔3〕。ここからイデアの三つの基本的性格の内二つが導かれる。即ち(1)イデアは事物とは別に存在しているその事物の形相(類似)である。(2)イデアは神の精神(本質)において存在する<sup>(41)</sup>。

ところで神は被造物を認識するのにこの類似を認識するを以て足りる。神のかかる認識は二種類ある。一つは被造物の思弁的認識である。類似はかかる認識の対象である限りで、「認識の根原」の性格を有する。そしてこの限りで類似は「観念」と呼ばれる。

しかし神は被造物を単に思弁的に認識するばかりではない。更にこれに加うるに実践的にも認識する。かかる認識の対象である限りで、類似は「範型」(exemplar)といわれる。したがって範型は認識の根原たる機能を含む。

イデアという名称は広義には「観念」を指す。しかし厳密には観念も含む「範型」を指す<sup>(42)</sup>。ここからイデアの基本的性格の三つ目が導かれる。(3)イデアは、「範型」と「認識の根原」の二つの機能<sup>(41)</sup>を有する。

このようにイデアは神の本質における類似であるところから三つの基本的性格を有することが判る。

〔10〕神の本質における類似はものとしては (secundum rem) 神の本質である。それでは神の本質はいかにしてイデアとなるのであろうか。ここでイデアの発出の仕方を見ることにしよう。

神の自己認識は完全である〔2〕。それ故神は自己の本質を完全に認識する。それは自己の本質を認識可能なあらゆる仕方によって認識することを意味する。あらゆる仕方によって認識するとは、神は自己の本質を、単にそれ自体あるものとしてばかりではなくて、被造物に、或る類似によって、分有され得るものとしても認識することである。

被造物によって「分有乃至模倣され得るもの」(participabilis vel imitabilis) と

して知性認識された神の本質 (essentia divina ut intellecta) が、その被造物の「イデア」乃至「固有の観念」(ratio propria) となる。<sup>(43)</sup> イデアはこのような仕方  
で発出する。

[11] ここから、一つの神の本質が多数のイデアとなることが理解される。神は自己の本質をこの被造物によって分有されうるものとして知性認識する。このとき神は自己の本質をこの被造物のイデアとして知性認識する。また神は自己の本質をあの被造物によって分有され得るものとしても知性認識する。このときには神は自己の本質をあの被造物のイデアとして知性認識している。このようにして神の本質は一つでありながら複数のイデアとなる。<sup>(44)</sup>

このことは神の単純性に反しない。神は一つの自己の本質を自由に種々の「観点」(ratio) から知性認識する。すると各観点に応じて神の本質は種々の「観念」(ratio) を有する。この観念がイデアである。神が自己の本質をさまざまな観点から知性認識したとしても、それはものとしては (secundum rem) 一つの本質であり、その単純性は損われない。<sup>(43)</sup> 複数の観念は神の自己認識の内容となっているからである。

[12] ここからイデアは神の本質の観念的区別によって生じることが判明する。イデアは神によって単に知性認識された本質 (essentia ut intellecta) にとどまる。神の知性によって単に把握された本質は、既述の如く [7], 「観念に属するもの」であって、そこに何の實在的なものも生じない。したがってイデアは「神によって知性認識された関連」(respectus intellecti a Deo) であって「實在的関連」(respectus reales) ではないといわれる。<sup>(45)</sup> それ故イデアは観念的關係であって、観念的に発出するといえよう。これが、「知性認識されたもの」(即ちイデア) は知性と全く同じであるからこれらの関係は實在的ではないといわれ、また「知性認識されたもの」は観念の発出ししか含意しないといわれる理由である。<sup>(46)</sup>

以上からもう一つのイデアの基本的性格が明らかとなる。即ち(4)イデアは神の本質の神自身による観念的区別によって生じる。

[13] 神の本質は無数のイデアを含む。しかし神はこれらのイデアを、その各々に対応する知性認識によって生ぜしめるのではない。神の自己認識は完全であるから、一つの知性認識を以って全イデアを生ぜしめるに十分である。そればかりではない。神の自己認識は完全であるから、その一つの知性認識は御言を発出せしめる

認識でもある。

それでは神の唯一の完全な自己認識によって発出せしめられた御言とイデアはいかなる関係にあるのであろうか。次にこれを見なければならぬ。

## V 御言とイデアの比較と関係

[14] 先ず御言とイデアを比較しよう。

- (1) 御言は神の知性の有する概念である。イデアは神の本質における被造物の類似である。
- (2) 御言は実在的に発出するもの (res) である。イデアは観念的に発出する観念 (ratio) である。
- (3) 御言は全三位一体と全被造物を明示する。イデアは全被造物を表現する。  
ところで御言は被造物を明示する限りにおいてイデアに似ていて、転用的に (metaphorice) イデアといわれる<sup>(48)</sup>。そこで被造物を明示するという観点より見た「御言」と「イデア」を比較しよう。
- (4) 両者は共に被造物に対してはその範型の形相 (forma exemplaris) であるという点で共通する<sup>(49)</sup>。
- (5) しかし御言は「他のものから引き出された範型の形相」(ab alio deducta forma exemplaris) を名付けたものである。それ故ペルソナである。それに対してイデアは範型の形相を出所に無関係に絶対的に名付けたものである。それ故イデアは神の本質である<sup>(49)</sup>。
- (6) 御言は一つである。全被造物は一つの御言によって表現される。全被造物は神においては一 (unum) であるからである。それに対してイデアは複数存在する。一つの被造物が表現されるイデアによっては他の被造物を表現することはできない。一つのイデアはそれに連関する被造物しか表現せず、それに連関しない別の被造物を表現するには別のイデアを必要とする<sup>(50)</sup>。
- (7) 御言は第一に (primo) 神自身を振り返る。その次に (ex consequenti) 被造物を振り返る。それ故御言が被造物を表現するのは附帯的である。しかしイデアは被造物を直接的に (directe) 振り返る<sup>(50)</sup>。それ故イデアは被造物に直接的に関わり、世界の創造の原理となる。

それでは以上の如く互いに異なる御言とイデアはいかに関係し合うのであろうか。

(8) 御言はイデアの存在する場である。つまりイデアは御言において、被造物の「制作の観念」(ratio factiva)として、含まれる<sup>(51)</sup>。

## VI 結論

[15] 神は純粹現実態である。したがってその認識は完全である。

神はかかる一つの知性認識の働きによって自己を認識する。そして自己の内に自分自身の唯一の「可知的形象」を発出する。この形象によって自己と万物を認識する。かかる形象が御言である。それ故神の一つの御言は単に神自身を表現するだけではなくて被造物すべてをも表現する。

ところが神は、自己に関しては、これを思弁的認識の対象とするのみであるが、被造物に関しては、これらを単に思弁的認識の対象のみならず実践的認識の対象にもする。それ故御言は、神に関しては、これをただ表現するだけであるが、被造物に関しては、これらを単に表現するばかりではなくて又造りもする。それ故イデアは神のかかる「認識の対象」であり、被造物の認識と制作の根原として、御言の内<sup>(52)</sup>に含まれる。

御言は実在的に発出する。したがってもの(res)である。これに対してイデアは観念的に発出する。したがって観念(ratio)となる。そして神の知性認識の内容をなす。

しかし、かかる神の自己と万物の認識、御言とイデアの発出はすべて純粹現実態なる神の唯一の知性認識によるのである。

### 註

(1) 山田晶、『トマス・アクィナス』世界の名著・続5 中央公論社 377~378 頁 註(1)

(2) 人間知性における「概念」は知性認識することによって「形成されたもの」(formatum)である。概念は実在的に発出するといわれる。それ故概念はもの(res)の一種であり、「観念」(ratio)と区別される。De verit., 4, 2, C; 註(24)参照。神における「概念」も同様に実在的に発出し、もの(res)である。

これが「御言」である。これに対してイデアは観念的に発出する観念である。かかる観念は厳密には、人間知性には存在し得ない。それ故イデアは人間知性においては、厳密には存在し得ない。

- (3) *Summ. theol.*, I, q. 18, a. 3, ad 2 (以下書名を省き I, 18, 3, ad 2 の如く記す)。山田晶「トマス・アクィナスにおける《causa rerum》について」(『哲学研究』第534号 296~300頁)
- (4) I, 14, 1, C.
- (5) I, 79, 2, C.
- (6) この四つは人間知性においては同一ではない。
- (7) I, 14, 2, C ; I, 14, 4, C
- (8) I, 14, 2, C ; Et sic (Deus) seipsum per seipsum intelligit.
- (9) I, 14, 16, C ; Deus de seipso habet scientiam speculativam tantum : ipse enim operabilis non est.
- (10) I, 14, 9, C ; I, 15, 3, ad 2, *De verit.*, 2, 8, C ; 3, 6, C ; かかる非有については山田晶「非有のイデア」(『在りて在る者』創文社 361~384頁) 参照。
- (11) I, 14, 5 C.
- (12) *Ibid.*, Alia autem a se videt.....in seipso, in quantum essentia sua continet similitudinem aliorum ab ipso.
- (13) I, 14, 16, C ; De omnibus vero aliis habet scientiam et speculativam et practicam.
- (14) I, 14, 16, ad 2, omnia alia a se videt in seipso, seipsum autem speculative cognoscit ; et sic in speculativa sui ipsius scientia, habet cognitionem et speculativam et practicam omnium aliorum.
- (15) I, 18, 3, ad 1 ; 1, 27, 1, C ; 1, 85, 2, C ;
- (16) 「それによって知性認識する形象(形相)」のそれによっては *qua* 或は *secundum quam* 或は *per quam* と表現される。
- (17) I, 85, 2, C ; et similitudo rei intellectae, quae est species intelligibilis, est forma secundum quam intellectus intelligit.
- (18) I, 15, 2, C (山田晶訳), このテキストの箇所と区別は山田晶先生の御指摘に負う。
- (19) I, 27, 1, C ; ita secundum actionem quae manet in ipso agente, attenditur processio quaedam ad intra. Et hoc maxime patet in intellectu, cuius actio, scilicet intelligere, manet in intelligente. Quicumque enim intelligit, ex hoc ipso quod intelligit, procedit aliquid intra ipsum, quod est conceptio rei intellectae, ex vi intellectiva proveniens, et ex eius notitia

procedens. Quam quidem conceptionem vox significat : et dicitur *verbum cordis*, significatum verbo vocis.

- (20) I, 34, 1, C.
- (21) *De verit.*, 4, 2, C ; id ad quod operatio intellectus nostri terminatur, quod est ipsum intellectum, quod dicitur conceptio intellectus. 人間知性における可知的形象は「知性認識されたもの」の類似 (similitudo) である限りにおいて、「知性認識されたもの」といわれる。したがって、知性の「概念」もこの限りにおいて「知性認識されたもの」といわれる。
- (22) 註(19), *De verit.*, 4, 1, C.
- (23) I, 34, 1, C ; Dicitur autem proprie verbum in Deo, secundum quod verbum significat conceptum intellectus. *De verit.*, 4, 1, C.
- (24) *Declar.*, 3 ; quandocumque autem (intellectus) actu intelligit, quoddam intelligibile format, quod est quaedam proles ipsius unde et mentis conceptus nominatur. *Ioan.*, I, 1, n. 25 ; quia de ratione intelligendi est quod intellectus intelligendo aliquid formet ; huius autem formatio dicitur verbum ;
- (25) I, 27, 2, C, ad 2.
- (26) I, 27, 2, C.
- (27) I, 27, pr. ; I, 29, 4, C, ペルソナは自存する起源の関係 (relationes originis ut subsistentes) を表示する。
- (28) I, 34, 2, ad 3, ut (Filius) ostendatur omnino similis, dicitur *imago* ;
- (29) I, 34, 2, ad 3, Nam ut ostendatur connaturalis Patri, dicitur *Filius* ;
- (30) 可知的形象をペルソナ的で (personaliter) はなくて、本質的に (essentialiter) 表示すれば、「智慧」等と呼ばれる。I, 32, 2, C.
- (31) I, 27, 1, ad 2, necesse est quod verbum divinum sit perfecte unum cum eo a quo procedit, absque omni diversitate.
- (32) I, 30, 1 ad 2, ad 3.
- (33) I, 28, 4, C.
- (34) I, 28, 1, C ; I, 13, 7, C.
- (35) 例えば intellectum は intellectus から観念的に発出する (*De verit.*, 4, 2, C)。それ故両者は観念的な関係であり、観念的に区別される。
- (36) I, 28, 1, C.
- (37) I, 29, 4, C ; I, 30, 1, C.
- (38) *De verit.*, 4, 2, ad 1.
- (39) *Ibid.*, 4, 4, C ; 4, 5, C ; I, 34, 3, C.

- (40) I, 34, 1 ad 3, Pater enim, intelligendo se et Filium et Spiritum Sanctum, et omnia alia quae eius scientia continentur, concipit Verbum ; ut sic tota Trinitas Verbo dicatur, et etiam omnis creatura ;
- (41) I, 15, 1, C ; I, 15, 3, C.
- (42) *De verit.*, 3, 3, C ; I, 15, 3, C.
- (43) I, 15, 2, C ; *De verit.*, 3, 2, C.
- (44) 前註及び山田晶, 「トマスのイデア論と残された問題」『中世思想研究』XX, 1978。
- (45) I, 15, 2 ad 4.
- (46) I, 28, 4 ad 1.
- (47) *De verit.*, 4, 2, C ; Si autem secundum similitudinem alterius tantum, scilicet quod est intellectum, sic hoc nomen verbum in divinis non importabit processum realem, sed rationis tantum, sicut et hoc nomen *intellectum*.
- (48) *De verit.*, 4, 1, C.
- (49) *Ibid.*, 4, 4 ad 4.
- (50) *Ibid.*, 4, 4 ad 5.
- (51) I, 34, 3, C ; quia in Verbo importatur ratio factiva eorum quae Deus facit.
- (52) I, 34, 3, C.